

またいくほどもわかれさりけり

明治天皇

とるさをの心なくともこきよせよ

あしまのをふねさはりありとも

小野古道

妹か門かどいている毎こゝろにはやゆきて

はやかへりこといひし人はも

千里

月つきみればちゝに物ものこそ悲かなしけれ

我が身みひとつの秋あきにはあらねど

かた枝えださすおほのうらなし初秋はつあきに

宮内卿

なりもならずも風かぜそみにしむ

式子

行末ゆくすゑは今いまいく世よとかいはしろの

岡おかのかやねにまくらむすはん

圓珠庵契冲

我われを知る人ひとは君きみのみ君きみをしる

人もあまたはあらしどそおもふ

もろともにみはやと思おもふ人はみな

苔の下なりあきの夜の月

宗尊親王

ありて身のかひやなからん國のため

民のためにと思ひなさは

菅文時

水の面に月のしつむを見さりせは

我はかりとや思ひはてまし

顯輔

難波江のあし間にやとる月みれば

我身ひとつもしつまさりけり

定家

あけまきのなかき契を結こめ

おなし心によりもあはなん

明治天皇

國民の力のかきりつくすこそ

わかひのもとのかためなりけれ

荷田東麿

嵐ふく音もおよはぬ雲の上は

いかにしつつけく月のすむらむ

西行法師

しけき野をいく一村に分なして

さらに昔を忍ひかへさむ

荷田蒼生子

うちむかふ月は一つのかげながら

うやふは千々の思ひなりけり

戸田茂睡

わかの浦にゆきかふとりの跡とめて

猶も正しきみちやもとめん

加茂真淵

夕はされは海上かたつ沖つ風

くもゐにふきて千鳥なくなり

田安宗成

千鳥すら女よひかはし遊ふなり

なとてや人のひとりたのしふ

和泉式部

黒髪の亂れもやらて打ふせは

まつかきやりし人を戀ひしき

柿本人丸

さをしかの妻とふ山の岡へなる

わさ田はからし霜はおくとも

ちる花の忘れかたみの峯の雲

そをたれのこせ春の山風

良平

たえてやは思ひありともいかにせむ

葎の宿の秋の夕ぐれ

雅經

けふのみと春を思はぬ時たにも

たつことやすき花のかけには

躬恒

後鳥羽

わたつ海の沖つしほあひにうかふあはの

消えぬ物からよるかたもなし

信胤僧都

君すまは訪まし物をつの國の

生田の森の秋のはつ風

村田春海

なつなさく花のにほひにくれかねて

霞にのこるはるの山畑

宮内卿

立田山嵐や嶺によはるらむ

わたらぬ水も錦たえけり

大貳三位

吹く風そおもひはつらさくら花

心とちれる春しなけれは

加藤千蔭

鳥かねはふもとの雲にひゝきつゝ

軒端におつるありあけの月

河津美樹

ものゝふの草むすかはね年とりて

秋風さむしきちかふか原

本居宣長

軒くらき春の雨夜のあまそゝき

あまたもおちぬ音のさひしさ

順徳院

さ夜ふくるまゝにみきはやくほるらん

遠さかりゆく志賀の浦波

實定公

花みてはいとゝ家路にいそかれぬ

待らんと思ふ人しなけれは

木舟明神御歌

奥山おくやまにたきりて落おちる瀧たきつ瀬せの
玉たまちるはかり物ものな思おもひそ

後京極

梅うめか枝えだにきぬる鶯うぐいす春はるかけて
なけともいまた雪ゆきはふりつゝ

遍昭

浅あさみどりいとよりかけて白露しろつゆを
玉たまにもぬけるはるの柳やなぎか

有家

青柳あやなぎのいとに玉たまぬくしら露つゆの

しらすいく夜よの春はるかへぬらん

通具

梅うめの花はな誰たれか袖そでふれし匂におひそと
春はるや昔むかしの月つきにとはゝや

紀貫之

白露しろつゆも時雨しぐれもいたくもる山やまは
下葉したはのこらす紅葉もみぢしにけり

素性

思おもふとち春はるの山邊やまのへに打うちむれて
そこともいはぬ旅たび寝ねしてしか

青柳にぬくやしらつゆ玉のをの

玉もゆらゝにはる風そふく

栗田 土満

わかせ子かとき洗ひきぬぬはなくに

をきの葉そよき秋風のふく

土岐 筑波子

君かためおもひそ深くますかゝみ

涙の袖にうつる月かけ

齋藤 以奉

弓屋 倭女子

おもなくもてらせる月の光かな

中なる人やいかゝみるらむ

右 同人

佐保姫の霞の衣春をへて

たちぬふわさもあえまざるらむ

定 家

今宵たにくらふの山に宿もかな

曉しらの夢や覺ぬと

家 隆

初霜のなれもおきわてさゆる夜に

里の名恨み打衣哉

大江千里

照りもせずくもりもはてぬ春の夜の

朧月夜にしく物そなき

俊成

昔思ふ草の庵のよるの雨に

泪なそへそ山ほととぎす

定家

あくかれし雪と月との色とめて

こするにかほる春の山陰

定家

しるへせよ跡なき浪に漕ぐ船の

行くるも知らぬ八重の鹽風

式子

みちのくのあら野の秋の駒たにも

これはとられてなれゆく物を

俊成

又もこむ秋をたのむの雁たにも

鳴てそかへる春の曙

後京極

讀人不知

花とみておらむとすれば女郎花

うたてあるさまの名にこそありけれ

能因法師

おもふことなけれどぬれぬ我袖は

たゝあるのへの萩の露かな

俊成

(春)

春の夜は軒端の梅をもる月の

ひかりもかほることちこそすれ

十首歌人によませ侍ける時花の歌とてよめる

俊成

みよしの、花のさかりをけふみれば

こしのしらねに春風そふく

(夏)

攝政右大臣の時の歌合に郭公の歌とてよめる

俊成

すきぬるか夜はのねさめのほととぎす

こゑはまぐらにあることちして

同人

さみたれはたくものけふりうちしめり

しほたれまさるすまのうら人

いつとてもおしくやはあらぬとし月を

同人

みそきにする夏なつのくれかな

(秋)

八重やへむくらさしこもりにしよもきふに

いかてか秋あきのわけてきつらん

同人

夕ゆふされは野のへの秋風あきかぜ身にしみて

うつらなくなりふかくさのさと

同人

石いしはしる水みづのしら玉たまかすみえて

きよたき川かはにすめる月つきかけ

保延ほえんの頃ころはひ、身みを恨うらむる百首歌しひゃくかよみ侍はたりける時とき、虫むしの歌うたと
てよみ侍はたりける

同人

さりともとおもふ心こころもむしの音ねも

よわりはてぬる秋あきのくれかな

秋あきの歌うたとてよめる

藤原定家

しくれゆくよもの梢こずえの色いろよりも

秋あきはゆふへのかはるなりけり

(冬)

冬きてはひとよふたよをたまさしの

定家

葉わけの露のどころせきまで

崇徳院に百首の歌奉りける時、落葉の歌とてよめる

俊成

まはらなるまさの板屋に音はして

もらぬ時雨やこの葉なるらん

圓位法師人々にすゝめて百首よませ侍ける時に、時雨の歌

とてよめる

しくれつるまやの軒端の程なきに

定家

やかてさしいる月のかけかな

千鳥をよめる

俊成

すまの關ありあけの空になくちどり

かたふく月はなれもかなしき

同人

月さゆるこほりの上にあられふり

こゝろくたくる玉川の里

(離別)

百首歌よみ侍りける時、別の心をよめる

定家

わかれてもころへたつなたひ衣

いくへかさなるやまちなりとも

(霸旅)

俊成

浦つたふいそのとまやのちまくら

きつもならはぬ浪のおとかな

同人

あはれなる野鳥かささの庵かな

(賀儀)

露おく袖に浪もかけけり

俊成

わか友と君かみかきのくれ竹は

千代にいくよのかけをそふらん

攝政右大臣に侍ける時、百首歌よませ侍けるに祝歌五首が

中によみ侍ける

俊成

百千度うらしまか子はかへるとも

はこやの山はときはなるへし

(戀)

同家に百首歌よみ侍けるとき、はしめたる戀の心をよみ侍ける

俊 成

ともしするは山かすその下つゆや

いるより袖はかくしほるらん

しのふ戀

同 人

いかにせんむろの八島に宿もかな

戀のけふりを空にまかへん

同 人

おもひまやしちのはしかまかまつめて

百夜もおなじまらねせんとは

法性寺殿にて五月御供花時、男共歌よみ侍ける時、契後隱戀といへる心をよみ侍ける

俊 成

たのめこし野邊の道芝夏ふかし

いつこなるらんもすの草くさ

同 人

わするなよ世々のちきりをすかばらや

ふしみのさとのありあけの空

同 人

戀をのみしかきの市にたつ民の

たへぬおもひに身をやかへてん

攝政右大臣の時、家の歌合に戀の心をよめる

あふことは身をかへてともまつへきに

同人

世々をへたてんほどそかなしき

同人

おく山の岩かきぬまのうきぬ繩

ふかき戀路に猶みたれけん

同人

しきしのふ床たにたへぬなみたにも

こひはくちせぬ物にそありける

定家

しかはかり契りし中もかはりける

この世に人をたのみけるかな

(雜)

山家の月といへる心をよみ侍ける

俊成

すみはひし身をかくすへき山里に

あまりくまなき月のかけかな

般富門院にて人々百首歌よみ侍けるとき

いかにせんさらてうき世はなくさます

たのめし月もなみた落けり

二條院の御時四代まで侍臣たることをおもひてよみける

俊 成

いかなればしつみなからに年をへて

よゝの雲井の月を見るらん

俊 成

遁世の後花の歌とてよめる

雲の上の春こそ更らにわすられぬ

花は数にも思ひ出しを

花盛りに法性寺にまゐりて金堂の前の花の散りけるを見て

俊 成

よみ侍ける

ふりにけるむかしをしらはさくら花

ちりのすゑをもあはれごはみよ
圓位法師かすゝめける百首の歌の中に花の歌とてよめる

定 家

いつこにて風をも世をも恨みまし

よしのゝおくら花は散りけり

述懐の百首歌の中に夢の歌とてよめる

俊 成

うき夢はなこりまでこそかなしけれ

このよの後もなをやなげかん

述懐の百首歌よみ侍ける時、鹿の歌とてよめる

世の中よ道こそなけれおもひ入る

俊 成

山のおくにも鹿そなくなる

今上の御時、五節の程、侍従定家過あるさまに聞召すこと
有て、殿上のぞかれ侍ける、その年も暮れにける、又の年
の彌生の朔日頃に院に、御氣色給はるべき由、左少辨定長
が許に申侍けるに添へて侍りける

俊 成

あしたつの雲路まよひし年くれて

霞をさへやてたてはつへき

(釋教)

法師品漸見濕土泥決定知近水の心をよめる

俊 成

むさし野やほりかねの井もあるものを

うれしく水のちかつきにける

俊 成

更らに又花をふりしくわしの山

法のむしろのくれかたのそら

(神祇)

俊 成

いたつらにふりぬる身をも住よしの

松はさりともあはれしるらん

同社の後の番の歌合の時、月の歌とてよめる

俊成

貴船川玉ちる瀬々の岩浪も

こほりをくたく秋の夜の月

定家

(戀)

松かねをいそへの浪のうつたへに

あらはれぬへき袖のうへかな

爲家

おく山の日かけの露の玉かつら

人こそしらねかけてこふれば

定家

戀しらぬ身のおこたりそ年へぬる

あらはあふよの心のつよさに

定家

くるゝ夜は忍しのたく火をそれとみよ

むろのやしまでも都ならねは

定家

あふことはしのふの衣あはれなど

まれなる色にみたれそめけん

定家

たれもこのあはれみしかき玉のをに

みたれて物を思はするかな

爲氏

しられしな心ひとつになけくとも

いはへは見ゆる思ひならねは

爲家

あふまでの戀そいのちに成りにける

としつきなかきものおもひとて

爲氏

いつはりの人のとかさへ身のうきに

おもひなさるゝ夕くれの空

爲氏

さぬくのわかれしなくはうき物と

いはてそみまし有明の月

爲家

たのましたな思ひわひぬるよひくの

心はゆきて夢に見ゆとも

(三三) 明倫百人一首

新古今集

後鳥羽天皇

奥山のおどろかもともふみ分けて

道ある世そと人に知らせむ

續後拾遺集

後嵯峨天皇

なか／＼に人より物を思ふかな

世を思ふ身のこゝろつくしは

新後撰集

龜山天皇

すへらきの神のみことはうけきつゝ

いやつき／＼に世を思ふかな

新千載集

後宇多天皇

時しあれば谷よりいつる鶯に

世をたすくへき人をとほしや

玉葉集

伏見天皇

いたつらに安き我が身をはつかしき

苦しむたみの心おもへは

風雅集

花園天皇

あしはらや亂れし國の風をかへて

民の草葉も今なひくなり

新葉集

後醍醐天皇

身にかへて思ふとたにも知らせはや

民の心の治めかたさを

新後拾遺集

光嚴天皇

十年あまり世をたすくへき名はふりて
民をし救ふ一こともなし

新葉集

後村上天皇

鳥の高におどろかされてあかつきの

ねさめしつかに世を思ふかな

新千載集

後光嚴天皇

なほさりにおもふゆえかこたちかへり

をさまらぬ世を心にそとふ

新葉集

宗良親王

君のため世のためなにかをしからむ

すてゝかひある命なりせば

新勅撰集

鎌倉右大臣

山はさけ海はあせなむ世なりとも

君にふたこゝろわれあらめやも

新葉集

文貞公師賢

思ひかね入にし山を分け捨てゝ

まよふうきよもたゝ君のため

内裏九十九番歌合

右大臣公賢

君かためふたこゝろなきこゝろにて

つかふるみちにむそちへにけり

後撰集

撫子なでこはいつれにともなく句こゝろへとも

貞信公忠平

おくれて咲さくは哀あはれなりけり

新古今集

菅原道實

海うみならすたゝへる水みづのそこまでも

きよき心こゝろは月つきとてらさむ

古今集

惟喬親王

天雲あまぐものたえす棚たなひく峯みねにたに

すめはすみぬる世よにこそありけれ

新葉集

前大納言隆俊

君きみかため我わがかとりきつる梓弓あづまゆみ

もとのみやこにかへさゝらめや

心珠詠草

三光院内大臣實枝

物もの毎ごとにくやしくもあるかかそいろの

諫いさめしころは思おもひしらすて

古今集

在平業平

忘れては夢ゆめかこそ思おもふ思おもひきや

雪ゆきふみわけて君きみを見みんとは

家集補

大中臣能宣

君きみか世よにみな底そこすめる岩清水いはしみづ

なかれて千代に仕へまつらむ

風雅集

藤原基俊

九つの澤になくなるたつの子を

思ふ聲は空にきこゆや

新千載集

前大納言經繼

月見てもなくさみなましなそもなく

心にやみに子を思ふらむ

新古今集

藤原俊成

を笹原風まつ露のきえやらで

このひとふしを思ひおくかな

新葉集

右近大將長親

いとせめて老ぬる身こそ悲しけれ

この別れ路をかきりとおもへは

三草集

源定信

明日よりは何にをたのみに眺めまし

嵐に枯れしなてしこの花

後拾遺集

藤原實方

うたゝねのこの世の夢のはかなさに

さめぬやかての命ともかな

玉葉集

前大納言光頼

いにしへも類たぐひもあらしわか宿やどに

枝えだをつらぬる柏木かしはぎのかけ

常山詠草じやうざんえいそう

源光國

數かずふれは君みぎかよはひのたか松まつや

連つらなる枝えだも千代ちよにならばむ

千載集せんざいしふ

權大納言實家

かつくかたえに片枝かたえかれぬる一つ松まつ

いつまでとてか朽くちのころらむ

家集かしふ

源宗行朝臣

君きみひとりとひこぬからに我宿わがやどの

道みちも露つゆけくなりなりにけるかな

續千載集つぐせんざいしふ

藤原高光

露つゆのことはかなき身みをはすまなから

君きみか千年ちよせを祈いのりやるかな

續古今集つぐここんしふ

邦省親王

なれし世よの友ともたにもなしいにしへの

見みえいる夢ゆめをたれにかたらむ

玉葉集ぎよくえふしふ

權中納言俊忠

春はるのはな秋あきのもみちを見みし友ともの

なかははこけの下したにくちぬる

家集

語るへき友さへまれになるまゝに

いと昔の忍はるゝかな

後拾遺集

あきらけきみよのはしめの朝日山

天てる神のひかりさしそふ

新葉集

きみを祈る道にいそげは神垣に

はや時つけて鳥もなくなり

萬葉集

兼好法師

前參議爲長

津守具貞

丈部道人麿

おほ君のみことかしくみ磯にふり

うの原わたる父母を抱きて

古今集

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど

君かみかけにます蔭はなし

萬葉集

ふる雪の白髪までに大王に

仕へまつればたふとくもあるか

萬葉集

み民われ生けるしるしあり天地の

讀人不知

橘諸兄

海犬養宿禰岡麿

古今集

榮ゆる時、あへらく思へは

讀人不知

わか君は千代に八千代にさゝれ石の

いはほとなりて苔のむすまで

萬葉集

山上憶良

しろかねも黄金も玉も何にかせむ

まされる寶子にしかめやも

土佐日記

紀貫之

世の中に思ひはあれと子を思ふ

思ひにまさる思ひなきかな

後撰集

兼輔朝臣

人の親の心はやみにあらねども

子を思ふ道にまどひぬるかな

承久記

鏡月房

勅なれば身をはよせてき物部の

八十字治川の瀬にはたゝねと

古今集

讀人不知

美濃の國關の藤川たえすして

君につかへむ萬代までに

萬葉集

大伴家持

丈夫は名をしたつへしのちの世に

きつづく人もかたりつくかね

千載集

道命法師

ともかくもわか身一つはなしつへし

残らん名こそうしろめたけれ

古今集

読人不知

雪ふりて年のくれぬる時にこそ

つひにもみちぬ松も見えけれ

古今集

読人不知

何をして身のいたつらに老ぬらむ

年のおもはむことをやさしき

古今集

凡河内躬恒

世をすて山にいる人山にても

なほうきとさはいつちゆくらむ

古今集

源重之

筑波山は山しけ山しけけれと

おもひいるにはさはらさりけり

拾遺集

読人不知

手枕のすきまの風も寒かりき

身はならはしものにもそありける

後撰集

なき名そと人にはいひてありぬへし

読人不知

心のはいかにこたへむ

壬二條

藤原家隆

ふるゆきもてらす日かけも君か代の

空につさせぬためしなりけり

山家集

西行法師

大海のしほひく山になるまでに

君はかはらぬ君にまします

拾遺集

平兼盛

世の中にたのしきものは思ふとち

花見てくらす心なりけり

萬葉集

沙彌満誓

ます鏡見あかぬ君におくれてや

あした夕へにさひつゝをらむ

東歌

橘枝直

おろかさの親によとは思はねと

教へおかるゝ子の行方かな

萬葉集

読人不知

旅人の宿りせ野に霜ふらは

わか子はくゝめ天のたつ村

六帖詠草

小澤 蘆庵

惜からぬ命なからもたらちねの

ある世はかくてあるよしもかな

同題和歌

大江 千里

秋の日は山のは近しくれぬまに

母に見えなん歩めわか駒

平家物語

康頼 入道

薩摩かた沖の小島にわれありと

親にはつけよ八重の汐風

玉葉集

源 道 濟

歸りては先つたらちねを見し物を

今日はたれにかあはむとすらむ

家集

加茂 真淵

なくくもわかれし時をわかれにて

別るゝ親のなきそかなしき

新後撰集

天台座主道玄

たらち根のあらしその世になどてかく

思ふばかりもつかへさりけむ

後撰集

僧正 遍昭

たらちねはかゝれとてしもぬは玉の

我黒かみをなてすやありけむ

太平記

藤原武時

故里にこよひはかりの命ども

しらてや人の我をまつらむ

古今集

読人不知

君をおきてあたし心をわれもたは

末の松山波もこえなむ

春葉集

荷田東磨

のかれても身は奥山の榊葉の

さかけく世をは祈らさらめや

萬葉集

読人不知

死にも生きも同じ心と結びてし

友やたかはむ我もよりなむ

家集

源信明

あたらよの月と花とを同じくは

あはれしられむ人に見せはや

古今集

紀友則

君ならて誰にか見せむ梅の花

色をもかをも知る人そしる

夫木抄

神こそは野をも山をも作りおけ

藤原基家

人にまことの道をふめとて

宗良親王千首和歌

大納言師兼

君のため民のためそと思はすは

雪もほたるも何にかあつめむ

家集

荷田在満

ふみわけよ大和にはあらぬから鳥の

跡をみるうみ人の道かは

求が花

加藤千蔭

がら國におひぬ櫻のかけしめて

むれつゝうたふ大和ことのは

萬葉集

笠朝臣金村

ますらをの弓ふりおこし射つる矢を

後見む人は語りつくかね

平家物語

平景高

もののふのとり傳へたる梓弓

ひきては人のかへすものかは

常山紀談

森迫親正

命より名こそをしけれ武士の

道にかふへき道へなければ
今昔物語

讀人不知

かそいろはあはれとも見よ燕すら
ふたりは人に契はぬものを

萬吟集

阿關梨契冲

あさうとて己が友よふ庭つ鳥

とりにもしかす心の心は

古今集

源慶法師

形こそみ山かくれの朽木なれ

心は花になさはなりなむ

家集

寂身法師

たをらしな人の垣根の梅の花

我にてしりぬをしき心は

家集

正覺法師

盛りをはとふ人おほし散る花の

あどをとふこそ情けありけれ

詞花集

俊惠法師

まこも草つのくみわたる澤邊には

つなかぬ駒も離れさりけり

肖像自讃

本居宣長

しき島の大和心を人とは、

朝日に匂ふ山さくららはな

閑田詠草

伴 蒿 蹊

末つひに海となるへき山水も

しはし木の葉の下くゝるなり

古今集

素性法師

底ひなき淵やはさわく山川の

浅きせにこそあた波はたて

新古今集

寂然法師

うき草の一葉なりとも磯かくれ

思ひなかけそ沖つ白波

風雅集

内大臣内經

しつむ身となに思ひけむ佐保川の

深きめくみのかゝりける世に

風雅集

大江宗秀

天の下たれかはもれむ日の如く

やふしもわかぬきみか恵みは

瓊玉集

宗尊親王

ありて身のかひやなからん國の爲め

民のためにと思ひなさは

家集

今さらいまさらに何なにか思おもはむはやくより

楫取魚彦

新千載集

君きみにまたせるかはねなるはや

従二位行家

色いろかへぬ黒髮山くろかみやまの山やまかつら

かくてやひさにつかへまつらむ

源 綱 條

鳳山詠草

心こころある君きみを木こかけにまちとりて

花はなも色香いろかをけふはそふらむ

小野 古道

家集

和歌の手引終

妹いもうとか門かどいている毎こゝろにはやゆきて

はやかへりこといひし人ひとはも

琴後集

見みせはやと人ひとをそしのふ山櫻やまざくら

平 春海

あかぬ心のへたてなければ

和歌の引手

不許複製

定價四拾錢

送料六錢

大正七年二月五日印刷
大正七年二月八日發行

編者 歌道普及會

發行者 越元次良

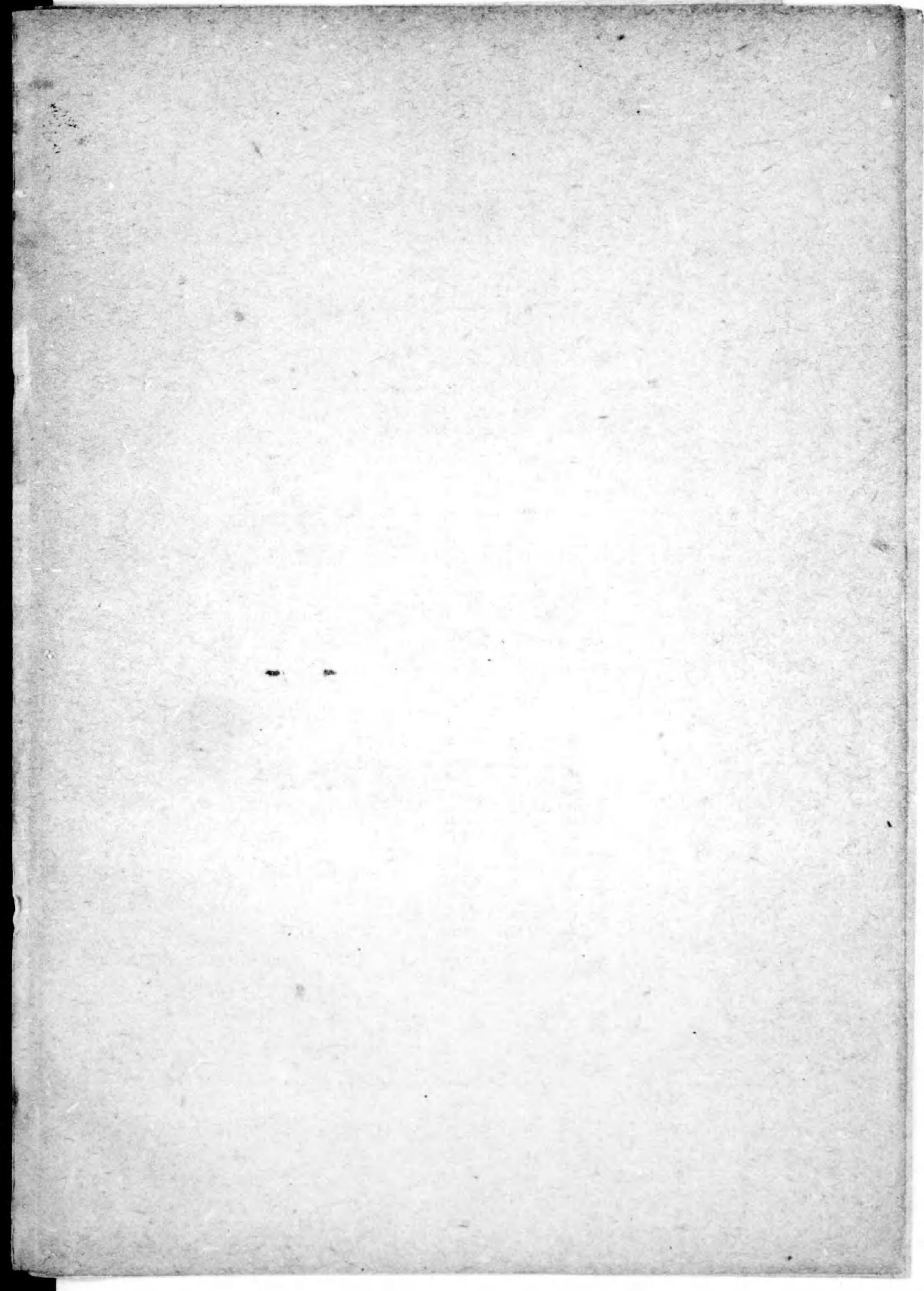
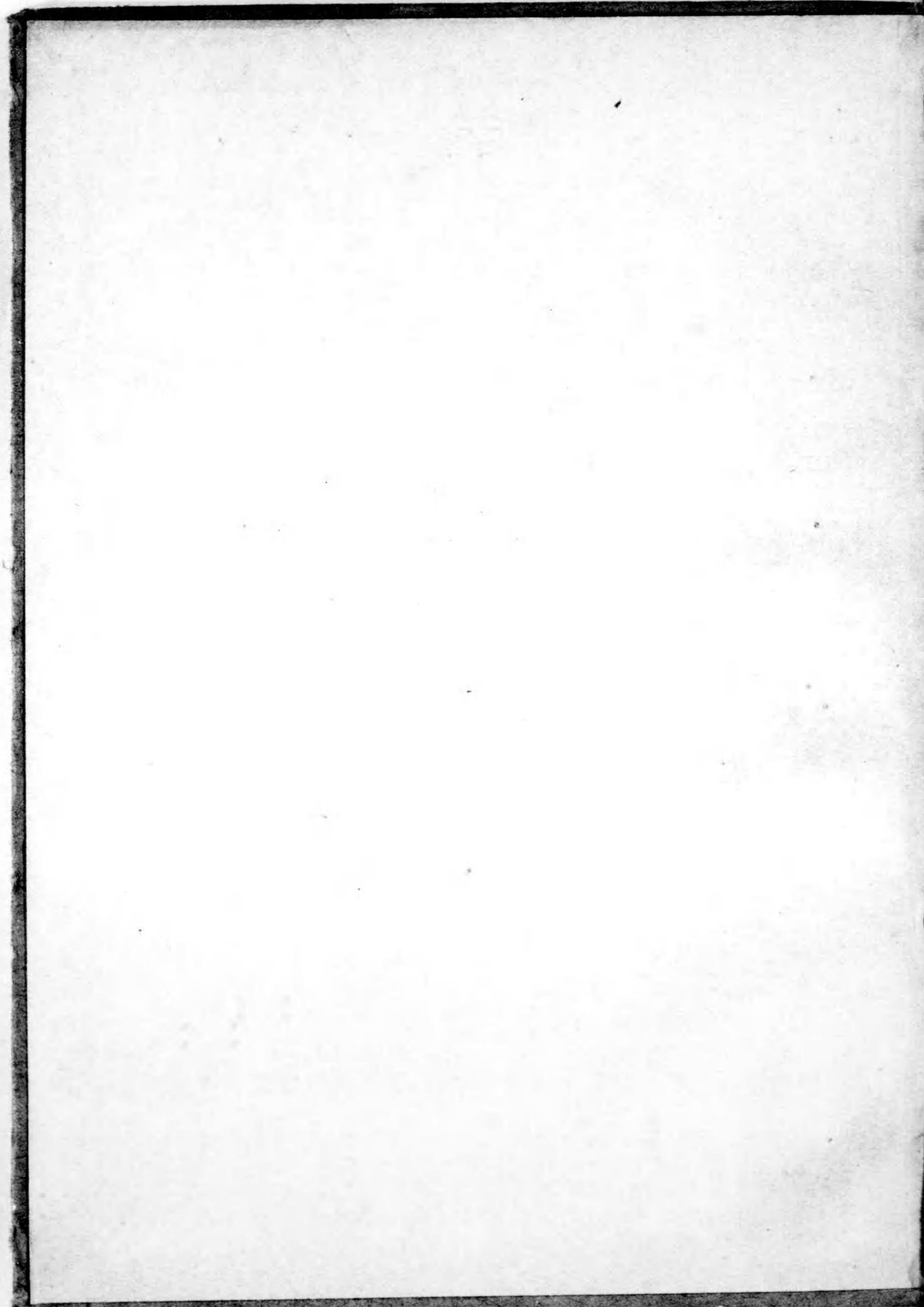
印刷者 塚田重五郎

印刷所 塚田印刷所

發行所

東 盛 堂

東京市日本橋區人形町通
電話浪花五三六四番
振替東京七五〇六番



終

